



奥松島縄文村歴史資料館開館20周年記念 鼎談

# 宮戸のたから (自然・景観・歴史・文化) を活かしたまちづくり

平成24年11月25日(日) 13:00～  
宮戸小学校 体育館

## プログラム

- 13:00 開会挨拶 阿部 秀保 (東松島市長)
- 13:10 報告「宮戸地区復興まちづくり計画について」  
佐藤 康男 (宮戸コミュニティ推進協議会会長)
- 13:30 クレイアニメーション「夢と希望にあふれる10年後の宮戸島」  
宮戸小学校児童
- 13:50 鼎談「宮戸のたから(自然・景観・歴史・文化)を活かしたまちづくり」  
コーディネーター 岡村 道雄 (奥松島縄文村歴史資料館名誉館長)  
パネリスト 本中 眞 (文化庁主任文化財調査官)  
阿部 秀保 (東松島市長)
- 14:50 閉会挨拶 工藤 昌明 (東松島市教育委員会教育長)

主催 / 東松島市 東松島市教育委員会  
共催 / 宮戸コミュニティ推進協議会

## 開催にあたって

特別名勝松島の核心をなす宮戸島には、縄文時代から継承されてきた美しい景観と豊かな自然があります。島内には、史跡里浜貝塚をはじめ7千年も前から島に暮らした人々の営みが残されており、自然と共に生きた祖先の知恵や技、精神文化の高さを知ることができます。今も、宮戸の人々の暮らしの中には、縄文からの伝統がしっかりと受け継がれています。昨年の東日本大震災で、島全体が被災し、大きな被害を受けましたが、宮戸の人々は古(いにしえ)より幾多の災害に見舞われながらも、豊かな自然と共存しながら、歴史と文化を育んできました。震災から1年8ヶ月が経過し、一日も早い再生と復興が求められる中、あらためて「宮戸のたから」を見つめ、地域の特性として、どう活かしていくかを考えます。

## 【プロフィール】



コーディネーター

### 岡村 道雄氏

奥松島縄文村歴史資料館名誉館長・奈良文化財研究所名誉研究員。1948年新潟県上越市生まれ。東北大学助手、東北歴史資料館を経て、文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門主任文化財調査官、奈良文化財研究所企画調整部長等を歴任。現在は、縄文遺跡群世界遺産登録推進専門家委員会委員をはじめ、全国各地の遺跡の調査・活用等の指導助言を行っている。

主な著書は『日本列島の石器時代』『縄文の生活誌』『縄文の漆』『旧石器遺跡「捏造事件」』など。



パネリスト

### 本中 眞氏

文化庁文化財部記念物課名勝部門主任文化財調査官。1954年大阪府生まれ。奈良国立文化財研究所において発掘調査および復原整備事業に携わる一方、全国各地の遺跡庭園や歴史的提案に関する調査研究に従事。現在、文化庁記念物課主任文化財調査官として世界文化遺産、文化的景観などを担当。石見銀山遺跡、平泉の世界遺産登録を実現し、現在、富士山、富岡製糸場等の世界遺産登録に精力的に取り組むかたわら、全国各地の史跡、名勝の保存整備指導などに携わっている。

主な著書は『日本古代の庭園と景観』『借景』など。



パネリスト

### 阿部 秀保氏

東松島市長。1955年東松島市生まれ。宮城県議会議員秘書、矢本町議会議員（5期）、議長（2期）を経て、合併後の2005年から現職。趣味は読書とスポーツ観戦。座右の銘は「努力、初心忘るべからず」。市政運営の原点は自然、歴史、文化、伝統といった地域の特色を活かしたまちづくりで、就任以来、住民自治組織による「協働のまちづくり」を推進し、東松島流の「地方分権」の実現を目指している。

# 宮戸地区復興まちづくり計画

宮戸地区復興まちづくり委員会

## ◆基本方針

東松島市復興まちづくり計画(H23.12)を踏まえ、宮戸全区の意見を集約し、宮戸地区復興まちづくり計画を策定しました。宮戸地区の復興まちづくり計画の基本方針は、市の復興計画の4つの基本方針に、宮戸独自の項目「宮戸のたから」を加えたものとします。

### 基本方針1. 防災・減災による災害に強いまちづくり

分野別の方向	取組項目	宮戸の課題と具体的な取組
(1) 防災・減災型都市構造の構築	① 多重防災構造の構築 [1次防潮施設] [緑地整備]	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 海岸施設・漁港施設の整備</li> <li>○ 防災集団移転促進事業                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 宅地整備</li> <li>・ 緑地・公園整備</li> <li>・ 排水整備(雨水・汚水)</li> </ul> </li> <li>○ 漁業集落防災機能強化事業                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 集落道整備</li> <li>・ 共同利用用地整備</li> <li>・ 緑地・公園整備</li> <li>・ 避難路整備</li> <li>・ 排水整備(雨水・汚水)</li> </ul> </li> </ul>
	② 避難場所、避難構造物、避難路等の確保	
	③ 安全で住みやすい住宅地・市街地の整備	
(2) 防災自立都市の形成	① 防災・減災体制と機能の強化	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 宮戸地区の防災計画の策定                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 防災施設・体制の見直し</li> <li>・ 自立分散型エネルギーの強化</li> <li>・ 東日本大震災の伝承</li> <li>・ 災害時相互応援協定</li> </ul> </li> </ul>
	② エネルギー、食糧等の持久力向上	
	③ 重層的な災害支援ネットワークの形成	

### 基本方針2. 支え合って安心して暮らせるまちづくり

分野別の方向	取組項目	宮戸の課題と具体的な取組
(1) 暮らしやすい居住環境の整備	① 恒久住宅の整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 災害公営住宅の整備</li> <li>○ 保険・医療・福祉の充実</li> <li>○ 宮戸小学校の統合</li> <li>○ 宮戸市民センターの整備</li> </ul>
	② 商業施設の整備と医療、福祉の公共交通等との連携	
(2) 安心して心豊かに暮らせる生活環境の向上	① 保険・医療・福祉サービスの充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自然の家の誘致</li> <li>○ 特別名勝松島ランドデザインの策定</li> <li>○ 復興地域計画の策定</li> </ul>
	② 教育環境の充実と文化の継承	
(3) 地域コミュニティの自治力の醸成	① 自治組織の再建と復興地域計画(仮称)の策定	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ コミュニティづくり                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 宮戸全体の繋がり</li> <li>・ 行政との協働</li> <li>・ 外部との連携</li> </ul> </li> </ul>
	② コミュニティ活動支援体制の確立	
	③ 市民と行政の共同によるコミュニティづくり	

### 基本方針3. 生業の再生と多様な仕事を創るまちづくり

分野別の方向	取組項目	宮戸の課題と具体的な取組
(1) 生業の基盤整備と再生	① 農・林・漁業及び製造業の再生と復興	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 水産業振興                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 漁場環境の再生と改善</li> <li>・ 漁港施設の復旧と改善</li> <li>・ 漁船・漁具の復旧</li> <li>・ 水産加工業の再生と改善</li> <li>・ 魚食普及・物産振興(ブランド化)</li> </ul> </li> <li>○ 商業・観光業振興                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 観光情報・防災情報の発信</li> <li>・ 遊覧船・観光施設の復旧</li> <li>・ 都市漁村交流</li> <li>・ 民宿の再興</li> <li>・ 復興イベントの開催</li> <li>・ 物産振興(ブランド化)</li> </ul> </li> </ul>
	② 商店街の再生と商業機能の回復	
	③ 担い手の仕事の確保	
(2) 観光資源の再構築と魅力づくり	① 観光資源の再生と体験学習型観光等の展開	
	② 農・漁・観光の融合展開	
(3) 新たな仕事の創出と起業の推進	① 復興まちづくりに係わる「市民の仕事」の創出	
	② 生活支援サービス等のソーシャル・ビジネス化	
	③ 人材育成等による起業の推進	

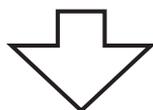
## 基本方針4. 持続可能な地域経済・社会を創るまちづくり

分野別の方向	取組項目	宮戸の課題と具体的な取組
(1) 持続可能な地域経済・社会の構築	①再生可能エネルギー産業の創出とエネルギー・システムの確立	○宮戸地区のエネルギー利用計画の策定  ○地域経済循環  ○人材育成
	②地域循環型経済の確立	
	③多様な主体の地域コミュニティ参加の推進	
(2) 民間資源の導入	①官民連携手法によるまちづくり	
	②民間からの復興資金の導入	

### 【宮戸独自の項目】

#### 基本方針5. 宮戸のたから(自然・景観・歴史・文化)

- 自然的特性および歴史的な土地利用の変遷
- 土地に刻まれた災害痕跡や伝承などによる災害史
- 文化的特性の調査(集落の歴史と暮らし)



#### 宮戸のたからの復興まちづくりへの活かし方検討

- 景観や地域の歴史・文化を活かしたまちづくり
- 震災後の土地利用と新たな景観形成
- 観光、教育、地域振興等への活用
- 情報発信と地域づくり、ひとづくり



## 「夢と希望にあふれる10年後の宮戸島」

東日本大震災で宮戸島は、多くの家々や浜が津波で流されました。この震災に負けず未来に向かってがんばるために、去年、10年後の宮戸島の風景を全校児童29人、一人一人が画用紙に描きました。そのときに一人一人が願った宮戸の姿は次のとおりです。

椿、菜の花、昆虫、カモメなどにかこまれた宮戸になってほしい

のり工場や民宿で、家族やお客さんが笑顔になっている宮戸になってほしい

魚がいっぱいいて、釣りがたくさんできる宮戸になってほしい

森や大高森頂上などの自然の中で、笑顔あふれている人たちがいる宮戸になってほしい

きれいな海の宮戸になってほしい

きれいな夕日の宮戸になってほしい



「なっしてほしい」は、「もどっしてほしい」という願いを含んでいます。

そして、一人一人が描いた10年後の宮戸島の絵を、似た風景ごとにグループを作って話し合い、ベニヤ板4枚分の壁画にしたのがこの絵です。

今年の秋、東京の女子美術大学の先生方と一緒に、壁画に込めた願いを粘土でアニメーションにもしました。

船に乗って魚がたくさん釣れる海の様子、かわいい動物や植物があふれている山の様子、トラックでがれきがなくなり、テトラポットもたくさんできて、花にあふれた岸辺で縄文村キャラクターのげんちゃんが釣りを楽しんでいる様子です。

大きな壁画を作っていく活動や粘土で10年後の宮戸の様子を作っていく活動は、私たち小学生にできる宮戸島復興の活動そのものだと思っています。全校で絵を描いて、気持ちが一つになりました。絵も上手くいったし、これからも壁画やアニメに込めた気持ちを忘れずにいたいです。

つレイアニメーションができるまで

宮戸小学校 児童一同



## 鼎談に寄せて…

文化庁 主任文化財調査官

本中 眞

昨年の3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方及び関東地方の人々に対して、生命と日常生活の安全に危機的な状況をもたらしました。

あれから1年9ヶ月の期間が過ぎようとしている現在、時間の経過は、失われた生命に対する鎮魂の念を深めるとともに、人々に被災前のまちやむら、生活の記憶を呼び覚まし、自らが大切にしてきたものや将来に再生させていくべきものが何なのかを問いかける機会をもたらしたように見えます。それは、自らが育み、育まれてきた文化基盤の確認の過程でもあったと言えます。

特別名勝松島においても、みどりの松林、白い岩壁、青い海の合間を町場や田んぼが彩る優れた風景と震災復興のさまざまな取り組みとを如何に調和されるのかについて、多くの人々が議論に加わり、行動してきたのではないかと思います。おそらく、その過程では、すべての人々が、「松島に住まい、なりわいを営むということは、いったいどのような意味を持っていたのか、そして将来も持続するのか」について、深く問いかけてきたのではないかと思います。このたびのフォーラムでは、そのような議論を通じて、私たちの現在と未来の立ち位置についてお互いに確認できればと考えています。



震災前の宮戸島



大浜、月浜の被災状況



室浜の被災状況

# 大震災前の宮戸島風土記

奥松島縄文村歴史資料館名誉館長

岡村 道雄

これまで四年間宮戸島にしょっちゅうお邪魔して体験し、漁師さんたちなど島の人にいろいろなことを聞いてきました。縄文時代の前期始めに、島の形と気候風土がほぼ今のようになり、室浜には室浜貝塚ムラ、里浜には里浜貝塚ムラと、このたび月浜で発見した月浜貝塚ムラが、今から約七千年前から営まれ始めました。これらは、島の祖先が、海の幸・山の幸をとって暮らし始めた最古のムラです。そして、弥生時代以降の実態はまだ良くわかりませんが、江戸時代からも豊かな生活が持続されてきたことが明らかになっています。今も縄文時代の宮戸島も基本的な環境・生活は、あまり変わっていません。島の風土、産物に活かされて生きてきた、数千年間の生活文化が、蘇ってきます。島の風土にあった暮らしぶりを未来に伝え、島の将来を祖先の生き方に学んだら良いと思います。



## 【気象・風】

東風(こち)、東南風(いなさ)、辰巳ともいう。イナサモノ(イナサより少し南の風でも、あるいは東寄りの風もイナサを中心して呼んだ)、北西風(サガ、サガの人喰い風)、青葉ナレ(青葉のころ吹く北西風)、北風(ナライ)、北東風(キタゴチ)など。

## 【季節折々の暮らし】

### ○春

早春に群生したヤブツバキが花をつけ、3月彼岸になると磯では磯物という海藻(ワカメ・ヒジキ・ノリ)を採り始め、砂礫浜でアサリや岩場でツブやダンマッコと呼ぶ巻貝やシウリ(イガイ)などを採り、やや外洋寄りにイワシの大群、磯にはヒガンフグなどの群れも押し寄せた。

現在も、春のお彼岸から連休にかけて、潮の引いた岩場・磯にはワカメが群生し、たくさんの巻貝・シウリなども採れる。磯の波際にはヒガンフグが群れを成して産卵に押し寄せている。ツバキが咲き、ウグイスが鳴き、ツバメが飛び、連休には大高森にカタクリの群落、山腹のヤマザクラ林が見事に

花を咲かせる。ヤマザクラ、ヤマグワ、ヤマボウシなどの実を食べたが、少なくとも現在は山里に生えるセリ、ノビル、ウルイ、ヤマゴボウ、アザミ、フキ、ヤブカンゾウなどの山菜には、あまり目が向いていない。海藻があるからだという。

### ○夏

やがて山にフジの花が咲き、浜にシャリンバイが群れ咲くようになる。このころの海には、マダイ、クロダイ、スズキなどの大型魚が寄り始める。今も金属に素材は変わったが形は変わらないヤスやツリバリ、磯漁の方法(ナラッパと呼ぶ柴漬け法、タカツポと呼ぶウナギ漁やハモ(アナゴ)ドウが、つい最近まで残っていた。

梅雨時は嵯峨溪(特別名勝松島の中でも太平洋に面したこの岩壁は絶景、日本三大溪)には群生したセッコク(野生のラン)が、群生した雨に濡れてしっとりとした美しい岩場に淡いピンクの花が映える。

7月半ばころまでは魚が取れ、ウニも実が入って旬を迎える。盛んに岩礁の海に潜ってこれらを獲り、魚を釣ったりした。今も変わらない季節の恵みだ。真夏の漁は意外に低調であるが、浜辺では縄文時代の終わりころから平安時代まで、海水を濃縮して専用の製塩土器で煮詰める土器製塩が盛んに行われた。



稲ヶ崎から見た眺望



嵯峨溪に咲くセッコク



大浜に咲くハマヒルガオ

その後も石鍋・鉄釜などでの製塩が続いていたと思われる。縄文時代には、管理して育てていたウルシ林から漆を取り、精製して赤い顔料を混ぜて塗った漆器や漆塗りの装飾品を作ったのもこの季節だっただろう。

## ○秋・冬

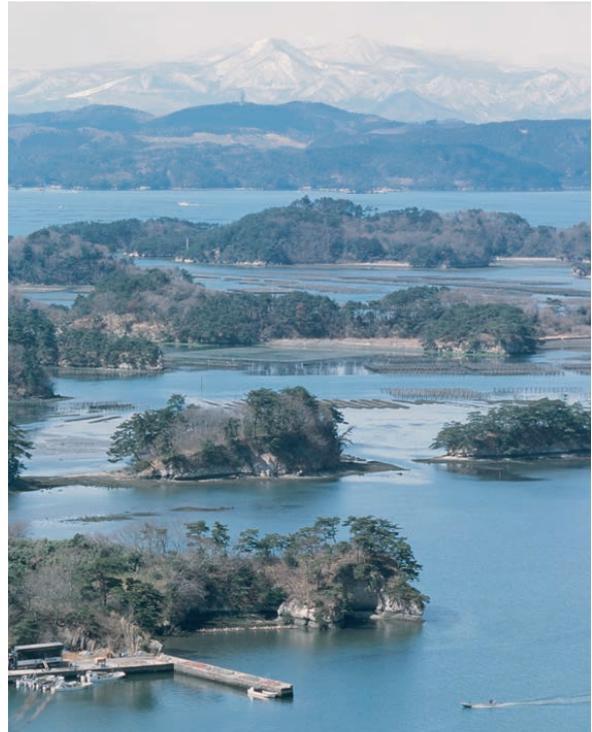
台風、秋雨を過ぎて、9月末から10月初めにハマギク、コハマギク、シャリンバイやヒガンバナが咲き、赤トンボが群れ飛ぶ。クリやクルミが実り、山里はヤマブドウ、マタタビ、アケビ、ソゾメなどの実、ヤマユリやウバユリの根、ヤマノイモがとれる。クリやクルミは貯蔵され、特にヤマグリは林を育てて実を大きくして多量に収穫し、カチグリなどの保存食を作っただろう。このころ



牡蠣いかだ

から再び海の恵みも豊かになり、サバ、アナゴ、ハゼ、そして産卵でやや浅瀬に群れたアイナメを追い込んで獲った。

秋から初冬に行われるハゼを船上から釣るジュズッコは、今でも辛うじて行われている。ウミウを多く獲っていたが、冬鳥の渡来コースにあった宮戸島では、カモ類、ケイマフリ(アカアシ)などの冬鳥もイヌを連れて獲り、解体していた。今は名産品となっているカキは、当時から冬に浜辺で剥いて生食や干し貝にもした主要な食べ物だった。



松島湾

## 【四ヶ浜集落と人々のつながり】

各集落の各戸には、背負った丘陵上に氏神を祭り、集落を鎮守する神社、寺があり、墓地が集落周辺に点在していた。屋号で見ると集落内の位置(カミ、シモ、西東、共同井戸端、魚河岸)、移転元の字名や出身地、職業(カゴヤ、カジヤ、アブラヤなど)などを表し、道や寺社を中心にまとまりの良い集落を営み続けていた。元々は周囲の丘の上に畑、谷頭に溜め池をもつ谷水田を営み、海岸に近い丘陵上に共同の萱場(ムラカヤ)や柴薪などを調達する共同の山(ムラヤマ)を設けていた。ムラヤマ・ムラカヤでの共同作業、アワビ、ウニ・ワカメ・ヒジキの共同採取によっても、集落のまとまり、相互扶助が護られてきた。

一方、寺や神社、伊勢講など各戸長、主婦、嫁、子供たちによる講を核にした自治組織、防災組織、親睦団体があり、自治、共同作業、祭祀、冠婚葬

祭などが担われ、紐帯が維持されてきた。各浜にもかってあったという子供たちによる正月行事「えずのわり」も共同体祭祀の象徴となり、月浜の「えずのわり」は国の無形文化財に指定されている。



震災後のえんずのわり



# おかげさまで、20周年。縄文村のあゆみ。

オープニングセレモニーでげんちゃんをお披露目。



縄文フェスタ。石の広場で行った活魚のつかみ取り。

ファンクラブと一緒に、3年かけて堅穴住居を作りました。



入館30万人の子ども達。

公園オープンを記念した体験イベント。



縄文シティサミット。

縄文村再オープンを記念して、演奏会をしていただきました。



## 1992. 10. 18 資料館OPEN

平成4年10月18日。奥松島縄文村資料館は「里浜貝塚の保存と活用」、「町おこし」の核になることを目的にオープンしました。里浜貝塚から出土した遺物を展示するとともに、遺跡の調査を継続。「新しい発見がある」資料館を目指してきました。

## 里浜貝塚、国史跡指定

### 3th 1995 入館者10万人達成

平成7年2月。里浜貝塚は「国史跡」の指定を受けました。それに伴い、史跡活用を目的に公園の整備を開始。

### 9th 2001 里浜貝塚ファンクラブ発足

この年、縄文村ファンの根強い要望に応え「ファンクラブ」を発足しました。合言葉は「縄文村で遊ぼう!」。発足とともに「村報縄文村」を発行。現在33号まで発行しています。

### 10th 2002 10周年記念「縄文フェスタin奥松島」開催

開館10周年を記念し、ファンクラブと地域が主体となり「縄文フェスタin奥松島」を開催。2日間で、8000人が来場しました。

## 平成の大合併により東松島市誕生

### 13th 2005 入館者30万人達成

合併により「東松島市」となったこの年、入館者が30万人を達成! 記念すべき30万人目は、富谷町立東向陽台小学校6年生の皆さんでした。

### 15th 2007 里浜貝塚ファンクラブ村びと1000人突破

### 16th 2008 さとはま縄文の里史跡公園OPEN 「縄文シティサミットin東松島」開催

平成7年から始まった公園整備も終わり、史跡公園がオープン! 「縄文人が見たままの景色」を見ながらの縄文体験もスタートしました。さらに、全国の縄文遺跡を有する都市が集まる「縄文シティサミット」を開催。全国からボランティアさんも集い、貴重な交流の場となりました。

### 18th 2010 入館者40万人達成

記念すべき40万人目は、東松島市立浜市小学校6年生の皆さんでした。

### 19th 2011. 3. 11 東日本大震災により被災・休館

#### 1年振りに再OPEN!

2012. 3. 18

昨年3月11日。東日本大震災によって、資料館は被災し、休館。その間も、全国の皆さんからたくさんの支援をしていただきました。震災から1年経った今年3月18日、資料館は再オープン。少しずつですが、以前のような資料館運営を目指しています。

### 20th 2012 開館20周年

おかげさまで縄文村は開館20周年を迎えました。これからも「奥松島から全国に「縄文」を発信!!」し続けたいと思います。どうぞ、今後も縄文村をよろしく願いいたします。

開館2年目。縄文教室がスタート!今年で19回目の長寿イベントです。

2002年、体験学習を本格的にスタート。体験型ミュージアムとして注目されました。

公園オープンの年に始まったのが「縄文の塩作り」。以来、人気イベントに成長しました。

ありがとう!!

